

「森と自然を活用した保育・幼児教育を考えるシンポジウム」を開催しました。

2月15日(土)、昨年に引き続き開催した同シンポジウムは、身近に森林や大規模な緑地がない環境でも、園庭や公園などの自然を活用した自然体験(自然保育)ができないか、また、幼稚園や保育所内で完結するのではなく地域や行政外部の専門家と連携することが有効ではないか、という問題意識のもと、基調講演・事例報告を行いました。定員を超える大勢の方に申し込みいただき、関心の高さがうかがえました。会場となった近畿中国森林管理局の大会議室では、近畿圏を中心に全国各地から集まった参加者が、長時間のプログラムにもかかわらず、講演や事例発表、ディスカッションに熱心に耳を傾けていました。登壇していただいた講演者・報告者の皆さんからも、いろいろな取り組み情報に触れて刺激を受けたとの感想をいただいています。

基調講演は「乳幼児における園庭・地域資源を活用した自然体験や外遊びのススメ〜全国調査より〜」というテーマで、園庭研究所代表の石田佳織先生にお話しいただきました。2016年から行ってきた約1700園近くの園を対象とした全国調査の結果をもとに、園庭と地域活用の実態を分析して見えてきた、戸外での保育を高めていくための6つの観点についての説明がありました。途中、「子どもの頃の思い出ワーク」として、参加者同士が「心に残っている外での体験」「どのような心身の成長や学びにつながった

日本の園庭は、見た目としては「すごい」「すごい園は多くないけど、本当に細やかなところまで、先生が「子どもたちにどうしてどうなのか」と考え工夫されている、私は世界でトップレベルなのではないのかなと思っています。」(石田)



か」「その時の環境」などを披露しあう時間が3分間×2回設けられました。予期せぬ展開でしたし、世代や育った環境の違いがあるにもかかわらず、会場中が子どもの頃の思い出で盛り上がりました。石田先生からは、「子どもの環境を考える上で一番大事なことは、私たち大人が子どものころを振り返って、あのときの気持ち・感覚を思い出すことです。自分の経験と合わせて、今の子どもたちの環境はどうなのか、というところを考えていただければと思う。」というお話があり、このワークの意義を理解できました。

事例報告は、普通のグラウンドだった園庭を、土壌改良を行いながら約40年かけて見事な樹林に変えた「関西学院幼稚園(鑄物太郎氏)」の取り組み、千里ニュータウンという市街地の中の公園を活用し森のようちえんを続けてきた「森

園庭にカブトムシの幼虫が見つかって、私も興奮しました。「赤いクワガタがおるといって見てもいたら、非常にめずらしい、当時ニュースになるくらいの虫でした。これはハンミョウという虫、きれいですね。こういう心動かす体験ができるようになりました。」(鑄物)



幼児期の小学校に行くまでの3年間は、根っこを張るための耕しの時。飛んで来たどんな種もキャッチできる、ふかふかの土壌をつくるのがこの時期。見えないところだが、根に栄養を与えて、どんどん伸ばしていく。その土づくりを自分たちでするということがこの時期にはすごく大切だと思っています。」(田畑)



子どものいない地域なので危機意識をもっていた地元の方々が、私たちを地域の人からについて一緒に考える仲間に入れてくださった。まだ半しかたっていないけど、ずっとここにいたかのような、親戚のおばちゃん、おじちゃんが増えたような感じで、一緒に活動をしています。」(岡本)



の子教室(田畑祐子氏)の取り組み、行政と連携し地元住民と新たな関係を築きながら里山に近い環境で森のようちえんを実践している「森のようちえんウィズ・ナチュラ(岡本麻友子氏)」の取り組みの紹介がありました。

続いて、保育・幼児教育の現場をサポートする専門家の立場から、木材利用に関する教育活動II木育を行っている「木育フォーラム(米地徳行氏)」が関わって大阪産のヒノキ材を使ったテーブルとベンチを作った「両国保育所(正田智美氏)」の取り組み、数々の園庭を自然や植物・生きもの

3回シリーズで、1回目は子どもたちと先生、2回目は保護者があり、最後の3回目は地域の方も手伝ってくださった。大阪府産材を使ったDIYを通して、地域が盛り上がり、私たちにとっても楽しい思い出となりました。」(米地)



子どもたちは、大阪に生えていた木が板になって、それをのこぎりで切ったり磨いたり、ポンドや万力を使ってテーブルにしていくなかで、材料がモノになっていく過程をすごく楽しんでいました。」(正田)



に触れて育つ場として創造する「小泉造園（小泉昭男氏）」の取り組みの紹介がありました。

事例報告の最後は、森を活用した保育に関心のある公立保育園の保育士13名と市職員1名が「チーム森」を立ち上げ、研修や先進事例の視察を経て、園内外のフィールドで「子どもたちが自然の中で五感で感じ、自分のやりたいこ

植物を使ってこのような遊びができる、ということを、保育士はある程度知っておかないといけない。でも、それを子どもに指導するのではなく、子どもが自ら発見したときに共感してあげることが大事。保育士は子どもの前で自慢してはいけません。（小泉）



とをできる子に！」を合言葉に保育を実践している「岐阜県関市（長尾鮎子氏）」、「関市立田原保育園（乾千穂氏）」の取り組みの紹介でした。

事例報告後、コーディネーターの山崎春人氏と基調講演・事例発表を行った皆さんとのディスカッションでは、関市の先進的な取り組みに関心が集まっていました。

子どもたちは本当に遊びの天才だと思えます。発想や思い、自分たちで考え、仲間や自分の力で解決しようとする力はすごいと思います。これから子どもたちが自然の中で五感を感じ、自分のやりたいことをやりきる子になってくれたらと思います。（乾）

